

新刊
紹介

Books are the quietest and most
constant of friends; they are the most
accessible and wisest of councillors,
and the most patient of teachers.

同志社大学人文科学研究所編「林業村落の
史的研究」 京都・ミネルヴァ書房、A5
判五三七頁、定価二五〇〇円。

この書は、同志社大学人文科学研究所第
二研究のメンバーの手になる論文集であ
る。副題として「丹波山国郷における」と
あり、林業村落としての性格をもつ山国郷
を社会史、経済史の観点から追求した諸論
文からなっており、色々の角度から古代―
近代の山国郷の解明が試みられている。本
書の構成は、

序（吉川秀造）、Ⅰ山国盆地の集落景観
とその歴史地理的考察（木下良）、Ⅱ中

世山国庄の各体制（仲村研）、Ⅲ近世山
国本郷の惣郷宮座（竹田聰洲）、Ⅳ近世
山国の領主支配と貢租（秋山国三）、Ⅴ
近世村落共有山林と村落構造―中江村を
中心として―（井ヶ田良治）、Ⅵ近世枝郷
広河原村の土地保有と抵抗（富井康夫）、Ⅶ
近世山国郷の林業経営（岡光夫）、Ⅷ
丹波山村の同族組織と村落構造（杉本通
晴）、文献目録

となつている。山国郷は桂川の上流大堰川
のほとりに点在する村々からなり、古くか
ら京都への材木の供給地であった。そのた
め早くから商品経済が進展したが、必ずし
も近代化への道を順調に歩いたのではなか
った。綿や菜種の商品化とちがって、材木
の商品化には、平百姓は参加しにくい事情
があった。名主の系譜をひく上層農民の手
に山林保有、材木商品化の権利が握られて
いたからである。この階層は維新のときに
「山国隊」という郷土の軍隊を自発的に作
り、討幕運動に参加するほどの力を温存し
ていた。それが通常の農兵でなかったこと
ろに古さがある。

この研究は、貨幣経済の進展の意味では
新らしく、旧社会階層の存続の点では古い
山国郷の社会経済の解明に大きい成果をあ
げている。この研究会には熱心に有能な第
一線級の学者がそろっているところが強味
であろう。データが豊富に掲げられている
のは歴史研究だから当然であるが、数多い
統計表のなかには、ずい分見にくいものか
がある。もう少し工夫がはしかった。（安圃）

酒詰仲男（元文学部教授）著「貝塚に学
ぶ」 東京・学生社、B6判二四二頁、定
価四八〇円。

酒詰博士が急逝されたのは昭和四十年五
月のことで、書斎での読書中に発作でこ
まれたと聞いている。その当時の博士は、
持病のため決して御丈夫ではなかったもの
の、野外調査にもでかけられ外見にはお元
気であったから、私は迂闊にもその頃の博
士の日常の御研究については多くを知らな
かった。ところが、死後になって三つの未
発表の原稿が発見され、私たちは改めて学
者としての博士に敬服した。と言うのは、
博士は死の数年前に二つの大著『日本石器
時代地名表』と『日本縄文石器時代食料総

説』を出版されたばかりであったから、いつの間にか書かれたのかと不思議に思った。

三つの遺稿は、論文、翻訳、自叙伝風の研究の歩みの記録であり、このように種類の異ったものを同時に執筆されたのは、自らの命脈のせまったことを予知されての死への挑戦であったと私には考えられる。本書『貝塚に学ぶ』はこの遺稿の一つ、自叙伝風の記録であるが、残念にも昭和二十一年春で筆が停っている。

「富士が頂上まで見える美しい朝を、汽車はひたすらに東京へ向って走っていた」で始まるこの記録は、博士が同志社大学英文科を卒業し、東京のK中学へ赴任する昭和二年春から日誌風に回想をつづけておられる。その頃の博士は希望にみちた文学青年であり、共産党シンパとしての思想運動への参加がやがて檢舉、失業のコースをたどるのである。博士は弾圧のあと、歴史の徹底的研究と以後政治運動をやらぬことを決心したが、昭和九年には唯物史観にたつ『日本国家成立過程小論』を発表されたことは当時の博士の猛勉強のあとをしるのにはせむ。しかしさらに実証的な考古学、とくに

貝塚へと研究目標をかえられ、ついに終生のテーマに達せられたのである。大学卒業後に新しい分野を独力で学ぶことは容易でないが、大山史前学研究所での無給所員の生活、そして再び長い浪人生活の苦しさはが淡々と記録されている。昭和十四年になつてその業績が認められ、東京大学人類学教室に勤務されるようになり、やっと研究の場をえられたのである。

本書は同志社人であり、また日本の代表的な考古学者の苦難と成長の記録であり、官立大学という巨塔の内部をのぞかせてくれる貴重な現代史の記録であるから、考古学や人類学に関心をもつものだけでなく、ひろく現代人に読んでもらいたい。ただこれは純粹な意味での日誌ではなく、博士が最後に到達された位置にたつての回顧であるため、例えば思想運動弾圧の辺りは詳しくなく、博士の追悼録に当時の友人が語っているところに真相があるようである。なお挿図には皇居や天皇が大きく扱われているがこれは博士の意志によるものではない。

本書を世にだして頂いた学生社の鶴岡正

美さんと、あとがきで中断以後をまとめて頂いた岡山大学和島誠一教授にこの欄をかいて感謝したい。
(森 浩一)

伊谷隆一（大学院文学研究科学生）著「非戦の思想 土著キリスト者・柏木義円」東京・紀伊国屋書店、新書版二一〇頁・定価三〇〇円。

著者は同志社大学院（文学研究科）で新聞学を専攻する二十四才の学生である。

本書が公にされると、朝日その他の新聞が好感をもつて紹介し、私の知る二、三の著名人も積極的に評価しようとしている。

柏木義円（一八六〇—一九三八）を知る人は少いかも知れぬ。彼は同志社で学び、そこでしばらく教えたが、明治三十年より終生安中教会牧師となった。同志社時代は「同志社文学」を編集し、井上哲次郎の天皇制国家主義に挑戦し、安中時代では上毛教界月報」で近代日本の天皇制絶対主義、資本主義、帝国主義の諸問題にきびしい批評眼を以つて対決していった。武田清子氏が「人間観の相剋」（昭34）などで彼の思想を高く評価されて以来、彼は注目されてきた人物である。著者は柏木の論文を全部

通説し、明治・大正・昭和にわたる激動の時代思想とのかかわりに生きた彼の思想を鋭く分析し、巻末にはくわしい年譜をのせている。いずれもこれまで何人もなし得なかつたところみである。

著者は柏木の思想の中核を「愚俗の信」すなわち平凡な民衆のキリスト教への信仰的決断と覚悟とする。著者によれば、柏木は自己を愚俗の信におくが故に、キリスト教の愚かさをわらう仏教哲学者井上円了の学者の信と対決し、平民主義をとなえて民衆の啓発者であろうとした知識人徳富蘇峯ともちがった生き方をした。柏木の井上哲次郎批判も、彼が井上のなかに民衆と天皇の正しい関係を阻害するものを見たからである。また柏木が草深い田舎に落着いたのも、愚俗の農民にまみえ、彼らの共同体を形成しようとしたからである。彼は日露戦争に反対したが、彼は戦争によって民衆が国家と無理心中させられ、軍備拡張の犠牲となることをみたからである。ひろく柏木がキリスト教をもって近代日本の精神的基礎にきびしく対決してゆくところに土着キリスト者の本領がある、というのが著者の

見解である。

愚俗の信という場合、それは抽象的な人間の信仰でなく、伝統的な日本の価値観に生きる日本人がキリスト教とのふれあいでは生まれたキリスト教のことである。著者は柏木のなかに明治ナシヨナリズムとキリスト教のふれあいを考え、これをさきの諸思想との関連でとらえようとする。それが天皇を元首と仰ぐ愚俗の連帯意識となり、これに介入する政治権力の排除の思想となつた。また日露戦争に際して平和的膨張を唱える精神的帝国主義、戦死したキリスト者に対して国家はふさわしい荣誉を与えるべきだという主張になつたといひ、ここに柏木の思想的限界をみる。

二、三の所感をのべよう。著者が愚俗の信をもって柏木をとらえる独創的アプローチは適確であり、啓発されるところが少なくない。著者のいうとおり、愚俗は進歩的知識人によってでなく、神によって啓発されるべきものである。ではその故に福音伝道者柏木があるがままの愚俗をあるべき愚俗にひきあげようとする努力を著者が「大衆の原像を思想過程に喪失した」(一九二ペ

ーシ)ものと批判するのは、柏木の民衆観と著者のそれとのずれにもとづくのだからか。また著者は柏木の土着的ナシヨナリズムを彼のとぎすまされた社会批判をくもらせた影とみる。そういう面もあるが、またこれがなければ柏木が自己を愚俗と同視することも、また日本国家への責任やほしい対決意識はうまなかつたにちがいない。ひろく反体制側に立つ明治人のナシヨナリズムは慎重に検討する必要がある。

このほか難解な語、文脈不明の文章、誤字がかなりあるにせよ、若き著者が自分で考えようとする個性ある創作意欲には深い感銘をうける。同志社人らからぬ同志社人である柏木と著者の精神的結びつきをおもふのは私だけではないだろう。

(土肥昭夫)

園頼三著(大学名誉教授)「美の探求」

東京・創文社A5判四九〇頁、定価一五〇〇円。

著者は本学名誉教授。四十数年の園、同志社大学において、美や芸術の本質について講義を続けられた、その研究成果の集大成が本書である。したがって本書は、園博

士の美学体系を形成する高度な學術書である。にもかかわらず、「美の探究」と名付けず、あえて「美の探求」と呼ばれるのは、一つには著者の謙虚な気持を現わすものであろうが、より本質的には、永遠に美なるものを求め続ける著者の生活態度から由来するようにも思われる。著者は生れながらの美学者であった。美についても論じることのできる哲學者ではなく、美なるものを、そのあるがままに捉えようとする、そうしてその中に美であることが開示されることを求める、真の美学者であった。美学的研究の困難さは、美なるものを性急に理論化すれば、かえって美の本質的なものがこぼれてしまうという、純粹に抽象的な論理の世界に安住することができない点にあるともいえよう。「この学問はそれゆえ美や芸術を損傷したり歪曲したり若しくは取り違がすものであつてはならぬ」と著者はあとがきに誌している。すなわち美の探究は、本来的に美の探求でなければならぬのである。

本書は美の構造的特質を明らかにするために、三つの観点を掲げる。第一篇「美の

探求における意識の問題」、第二篇「美の探求における現象の問題」、第三篇「美の探求における意味の問題」、この三つの観点から美の本質に迫ろうとするのが、著者の意図である。内容はカントからハイデガー、サルトルに至るヨーロッパの伝統的な美学思想の理解と解釈の上に立って、國美学の独自の体系化が試みられている。本論の展開が、ヨーロッパの近世以降における美学思想の発展と相即的な関係のうちに叙述されている点も興味深いところである。このことはまた同時に、國博士の美学的遍歴の歴史をも示しているように思われるからである。本書は四九〇頁にわたる大著である。しかし美学における「意識の問題」、「現象の問題」及び「意味の問題」は、本来的に美的対象を解明すべき三側面であるが故に相互に重なりあう問題を含むと同時に、それぞれの側面からする美へのアプローチが、また一つの美学的方法としても可能であると考えられるならば、必ずしも國美学の本質を理解しようとする専門家にとつての貴重な文献であるというにとどまらず、さらに広く「美学」とはそもそも如何なる

学問であるかを知らうとする一般の研究者に対しても、広い展望と重要な手掛りを与えるものとして、好適な参考文献であるといえよう。ただ本書が國博士の退職記念事業の一環として刊行されたために、著者にとつてなお意に満たない点を残したとすれば、責任は出版を督促した私の側に在ることを付言して置く。
(金田民夫)

お 願 い

研究資料として、左記の雑誌を捜しておりませう。該当の雑誌をお持ちの方、またはその所在をご存知の方で、その旨をお教えいただければ幸いです。

同志社大学

人文科学研究所(CS)

『同志社文学会雑誌』第29号

刊 行 明治23年1月

発行所 同志社文学会